

「肝臓の外科」

Liver Surgery
—with operative color illustrations—

Roy Y. Calne 編

東北大学教授 葛西 森夫 監訳

神奈川県立こども医療センターこども病院院長

角 田 昭 夫

Roy Y. Calne というケンブリッジ大学教授が、世界各国から24人の著者を集めた肝臓手術の図解書である。著者の中に中華民国(台湾)、香港、ヴェトナム人が数名おり、全部肝葉切除を受け持っているところからみると、肝腫瘍はやはり東洋人に多いのであろう。

さて、先天性胆道閉塞症に対する肝門部空腸吻合は、今やカサイ手術として世界の認めるところであるが、本書の唯一の日本人執筆者は、この項を受け持たれた葛西森夫教授である。そしてこの縁をもって本書の日本語版監訳を葛西教授が担当され、3人の訳者の所属も東北大学第2外科および同小児外科である。

先天性胆道閉塞症の手術は7番目に登場し、頁数は15、25葉のカラー写真がちりばめられている。葛西教授のカサイ手術に関しては、今まで2種類の映画を拝見しているが、写真で説明する形の論文を見るのは

これが初めてで、stepwiseの解説はなかなか説得力がある。

まず図1は皮切、図2～8は胆嚢の肝床からの剝離・造影のための胆嚢内 tubing、肝十二指腸靱帯の肝門部までの剝離で、剝離には柄長、先細の剪刀が使われ、左右肝動脈には絹糸を通してマークされる。図9には肝内 Glisson 鞘へ通ずる肝門部結合組織塊へ入る門脈の切断が示される。次の図10、11はこの結合組織塊を前方および後方から見た状態が示される。

図12でいよいよこの結合組織塊の肝門部からの切離、すなわち本手術成否の決め手となる段階が示される。切離にはそれまでと同じ剪刀が使われる。図13で見る限り、この切断面は、結合組織の皮一枚を残しており、つまり肝実質自体は露出されておらず、これよりやや深めで切離するわれわれにとって、極めて参考となった。また切離範囲もあくまで

左右門脈枝内にとどめられているようである。

肝門部への腸管吻合が図16～21に示されるが、前後壁ともDexon結節縫合が用いられ、吻合終了後、前後壁とも数針補強の縫合が追加される。なお手順としては肝門部空腸吻合に先立ってY吻合が行われ、最後に二重Y吻合、腸瘻造設ということになる。図25に摘除索状胆管が示されるが、肝門部に面した部位に、肝実質はもちろん付着していない。

以上のごとくこの項は実により写真ばかりが示され、この項1つでも本書を買う意味があるように思う。Calne氏が序文で述べているように、この本は各項それぞれ著者の自由な裁量に任せているため、Calne氏自身必ずしも賛同しえない術式も示されているという。専門外のものとしてこれに関する意見は差し控えるが、少なくとも術中写真でなく、略図のみで示される項目もあって、多少玉石混淆の感を免れない。

時代に沿って肝移植の項もあり、また巻末の肝腫瘍の分類と組織像も、専門外のものにとっては啓蒙的であり、推薦に値する手術書と考える。

A 4判変型 298頁 図27 写真11

カラー写真164 色図56 1986

¥17,000 ㇔400

医学書院 刊